寄稿

砂塵とエジプト古代文明(2)

日本工営㈱　春　松　安　司

アブシンベル神殿を後にして、アスワンの街へ戻ってきた。今夜のホテルは、ナイル川を渡った西岸にあるという。

東岸から西岸に渡るには、船しかない。船？そう、船には違いなかった。ボートと称した方が適切かもしれない。

「この船は、手で漕いで行きます。船を漕ぐ人は、現地の人達です。彼らは、言葉は喋れますが、文字を持っていません。」

サブリ君は、この現地の人達の言葉はわからないらしい。アラビヤ語で喋るサブリ君は、意志が充分通じないので、やや焦り気味である。

しばらく船に乗っていると、現地の子供が小さなカヌーに乗り、近づいて来た。

「♭♭♭♭♪♪♯♯」

なにやら、一生懸命に歌を歌っている。

船の漕ぎ手は、ニコニコして子供に手を振っている。子供が近づいて来た目的は定かでない。

サブリ君は、「あまり、構わないでください。お金も上げないで下さい。」と言うので、しばらく知らん顔を決め込んでいたが、あまりにも一生懸命に歌を歌い、汗をかきながらカヌーを漕いでいるので、手を振ってあげたり、笑顔を振りまいていたりしていた。

ナヤル湖西岸のホテル（アスワン）

「もうすぐ、西岸に到着します。」

サブリ君は、子供を嫌いなのかも知れない。アブシンベル神殿の模様が入っているエジプトポンドで１ポンド（日本円で約36円）を、子供にそっと手渡した。

そうすると、その子供は、なんと「サラバジャ」と言って、さっさと引き返して行った。

サラバジャ？ここまで、日本人が来てい

るのか？

そう言えば、カイロ近くのハーン・ハリーリバザールに買い物に行った時、店の前で、ガラベイヤ（ワンピース風の布を纏っている）を着て立っているエジプト人が、「ボチボチでんな！」とか「バザールでゴザール！」と、言っていたのを思い出した。

日本人は、どこにでも来ているんだ。改めて、日本人の観光好きに驚愕した。

エジプトの観光案内書には、日本語は全く通じないと、書いてあった。そんな事はない。パピルスで作った絵や、絨毯を売っている店では、日本語をペラペラ喋る店員が必ず居た。

エジプトでは、水道水は、飲まない方が良いので、ミネラルウォーターを毎日買うのであるが、場所により、値段が違う。通常は３ポンド（約100円）なのだが、10ポンド紙幣を出したりすると、お釣りは、人の顔色を覗いながら１ポンド（１枚）ずつ渡し、本人が頷くまで、知らぬ顔を決め込んでいる。

時々、20ポンド紙幣を出したりすると、お釣りはない、と言うジェスチャーをされる事がある。

こうなると、もう大変である。水は欲しいし、お釣りがないのなら、まとめて６本位買った方が良い事になるからだ。

でも、ミネラルウォーターの入ったペットボトルを６本も持ち歩く訳には行かない。

アスワンのホテルは、ナイル川沿いに面しており、見晴らしは良い所だった。

ホテルで、久しぶりの夕食と相成った。

「飲み物は、どうしますか？」

サブリ君は、アルコールは、全く飲まない敬虔なイスラム教徒であった。

「エジプチアンビールは、余りおいしくないな！ハイネケンビールがいいな。」

林先生は、ビールが大の好物であり、朝以外は、必ずビールを所望していた。

確かに、ステラビールと言うエジプシアンビールは、おいしくなかった。でも、不思議と、一本飲むだけで酔うのである。

非常に経済的なビールかも知れない。

「僕も、ハイネケンビールにする。」

サブリ君が、運んできてくれたビールを一気に飲み干して、お代わりを頼んだ。

「オイ！オイ！食べるものが無いなー。」

ホテルのレストランは、バイキング風に、山盛りに食物が並べられていたが、パエリヤ、野菜、ソーセージ、チーズ、パン、スープ、それに、パサパサの肉と果物が整然と置かれていた。

食べ物の種類は豊富なのだが、我々の口に合うのが余り無いという事みたいだった。

でも、考え様によっては、非常に健康的な食事かも知れない。

エジプトには、地中海料理が有名だと言うので、一度、食した事がある。確かに、エビやイカなどの魚介類はおいしかった。それと、果物は、新鮮な味がした。

それにしても、香辛料には閉口した。何か腋臭の様な異様な匂いには食欲が減退した。

エジプト料理の最も有名なのは、鳩料理らしい。そう言えば、カイロ郊外の至る所に北海道のサイロに似た建物が目についた。その建物は、なんと、鳩を飼っている建物であり、その養育した鳩を食べるらしい。

平和の象徴である鳩を、この国の人達は食べる習慣がある。これも確かに国の違いであり、この国の常識なのだ。

かって、韓国に仕事で行った時、犬がソウル市内の至る所にぶら下がっていたのを思い出した。

でも、犬と知らずに食した時は、とてもおいしかった。鳩は、犬に比べたら食べ易いのかも知れないが、小さい時に飼っていた鳩を思い出し、どうしても食する事は、できなかった。

明日の朝が早いというので、早々にビールをやめて、コーヒーをもらう事にした。

「エジプチアンコーヒーにしますか？」

サブリ君は、エジプチアンコーヒーは、日本人には、合わないと言う。そこまで言われると、一度飲んで見たくなった。

「エジプチアンコーヒーで良いよ！」

林先生も一度飲んでみたいらしい。でも飲まない方が良かった。エジプトの砂塵と極めて調和的な粉だらけのコーヒー！本当に粉…否！砂塵か？と思いたくなるほどの粉、粉、粉だらけのザラザラしたコーヒーであった。

サブリ君は、なに食わぬ顔をして砂糖をたっぷり入れて、おいしそうに飲んでいる。

「エジプト人は、砂糖が大好物なのです。なんにでも砂糖をたくさん入れておいしくいただきます。どうですか？エジプチアンコーヒーの味は？」

「ウーン！まずくはないが、俺の口には、合わないな。」正直でないな。この医者め！林先生は、スプーンで少し飲んで、もう止めている。

次の日の朝は、ナイル川沿いに、アスワンからルクソールへバスで向かった。

「暑い！暑い！クーラーは効いてないの？」

「クーラーは、効いてないみたいですね」と、サブリ君は平然と言う。

座席は砂塵まみれで、少し揺れるとバスの中は、濛々としてくる。それに蒸し風呂に入っているみたいに、体がベタベタしてくる。

鹿児島育ちの自分にとって、こんなに暑い経験は、した事がないと思いたくなる位の暑さであった。空気の流通が全くない！このバスで4時間も揺られるのか…と思うと、やはり寝たふりを決めるしか無い。この国の慣習に従う（諦める）時は、寝たふりを決め込む事にしていた。

アスワンからルクソールへ向う街道沿いのなつめ椰子

ナイル川沿いには、なつめ椰子の木が鬱蒼と繁っている。そして、現地の子供達が屈託ない表情で明るく遊んでいる。バスの通り道は、砂塵の嵐なのに、平然として家の前に座って、バスをながめている老人や、赤ん坊を背負いながら話に夢中になっている婦人！平和的な風景に、少し安堵した。

これがこの国の平和な姿なのかも知れない。平和であれば砂塵があっても苦にはならないのだ。

それにしてもイスラム圏に住む女性が顔を隠すのは、理由があるのだろうが、別な意味で、わかる様な気がしてきた。

宗教的な色合いがあるのだろうが、とにかく砂塵にまみれて歩くのは、かなり、苦痛である。これは、どの国の人でも一緒だろう。砂塵から顔を守るためにも、この顔を隠す習慣は、とても合理的な気がした。

ルクソールに到着すると、トイレに行きたくなった。トイレは、どこに行っても、チップを支払わなければならない。

50ピアストル（16円）か、1ポンド（32円）で済むのだが、どうもこの習慣だけは、なじめない。

サブリ君は、「この国の殆どの人は、イスラム教徒です。金持ちの人は、貧しい人にお金を与えなければなりません。それと仕事がない人が大勢います。トイレの前でチップをもらう人は、それが仕事なのです。ですから、仕事をしている人にお金を払うと思えば良いのです。」

ふーん！そう思えば良いのか。

トイレの前には、観光地、空港、レスト

ラン、そしてホテルでも、必ず人が立っている。50ピアストルを支払って、中に入った。

ルクソール空港からカイロ空港へ向った。眼下には、荒涼とした砂漠然とした風景が広がっていた。

広い！とにかく広い国だ！何しろ国土の96％が砂漠だと言うのだから。その荒涼さが推し計れる。

久しぶりのカイロに着くと、なんと人、人、人の洪水であった。この国の人々は、交通ルールを全く守っていない。車と車の間を人が横断し、クラクションが鳴りやまない。

これが、この国の常識なのだ。でも、この国の真似をしてはいけない。昨年、日本人が車の間を横断しようとして、車に跳ねられ死亡した事故があったらしい。

クワバラ・クワバラ。

人口約1,600万人もいる大都会なのに、雑然としている。

カイロから約30分車で南へ行くと、メンフィス、サッカーラという街がある。

古代エジプトの首都であった土地であるが、現在では、農業が盛んな一寒村であった。

メンフィスには、ラムセス２世の横たわった像が収納されていた。

このラムセス２世という王様は、かなり、いろんな所に自分の像を建造している。自己主張の強い王様だったのかもしれない。

サッカーラを見学した後、一路、アレキサンドリヤに向かった。砂漠の中に作られた高速道路を約３時間かかって、アレキサンドリヤに到着した時は、すでに夕暮れ時であった。

アレキサンドリアの夕暮れ時のモンタザ公園

旅の最終地、アレキサンドリアの地中海

アレキサンドリヤは、カイロと違い、緑が多く、エジプト第２の都会に相応しい所

だった。ホテル前のモンタザ公園で、夕暮れ時の散歩をした。地中海に面したこの地は、クレオパトラがこよなく愛しただけの雰囲気が漂っていた。

とんだ3馬鹿トリオの3日間の短い旅は、この地で終わった。

こんど来る時は、もっとゆっくりと旅行で来たいものだと思った。

「もう、エジプトは良いな！今度は、メキシコに行きたいな！」と、老医師は、呟いた。

でも、この古代文明に直接触れる事が出来ただけでも感謝したい。

完